

白居易と天宝の遺民：「贈康叟」詩をめぐって

竹村，則行

<https://doi.org/10.15017/2332623>

出版情報：文學研究. 84, pp.61-97, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



白居易と天寶の遺民

——「贈康叟」詩をめぐる——

竹 村 則 行

白居易に「贈康叟⁽¹⁾」と題する七絶詩がある。八一九（元和十四）年、江州（湖北省）司馬から忠州（四川省）刺史へ転任した白居易が、忠州で見かけた天寶の遺民「康叟」に贈ったものである。

八十秦翁老不歸 八十の秦翁 老いて帰らず

南賓太守乞寒衣 南賓太守 寒衣を乞ふ⁽²⁾

再三憐汝非他意 再三汝を憐れむは他意に非ず

天寶遺民見漸稀 天寶の遺民 見ること漸く稀なればなり

この詩において、「南賓太守」（忠州刺史）たる白居易が、八十歳の高齡になってまだ故郷の秦（長安）に帰れずにいる「康叟」を再三憐れんで寒衣（暖衣）を与えるのは、「他意に非ず」、近來「天寶の遺民」を見ることがようやく稀

になつて来たからである。簡直に書かれたこの七絶詩からは、白居易の康叟に対する、共に長安を出て異郷をさすらう者としての同情、連帯感と、繁榮の生き証人たる天宝の遺民に対する限りない憧憬の念とを読み取ることができ
る。

中唐の七七二年―八四六年を生きた白居易にとって、盛唐の開元（七一三―七四一）、天宝（七四二―七五六）年間は、既に半世紀以上も前に過ぎ去つた時代であつた。にもかかわらず、白居易は、この「贈康叟」詩に象徴的に見られる様に、当時なお身近に生存していた天宝遺民に対して、強い憧憬の念を抱いている。このことは、同時に、白居易が開元天宝時代に対して格別の感情を有していたことを意味する。このことを裏付けるように、白居易の詩文集を繙くと、そこには、既に白髪となつた天宝の遺民を始めとして、李白、杜甫、あるいは韋^補庶物への思い、更には霓裳羽衣曲や開元以来の古木に至るまで、盛唐の息吹きを伝える全ての文物に対する白居易の殊更な感情が赤裸々に詠まれている事実を発見するのである。中唐の詩人白居易において、盛唐の開元天宝時代は果してどのようなものとして扱えられていたのであろうか。

ところで、白居易のこの詩に登場する「康叟」とは如何なる人物であつたのか。これら天宝の遺民は、多くの場合、安祿山の乱を契機にして都長安を離れ、天下を流浪する経歴を持つが、この康叟の場合はどうであつたであろう。更には、盛中唐詩にしばしば見える樂人康洽、康崑崙との関係は如何であらうか。いま、白居易の「贈康叟」詩を案頭にして思いをめぐらすとき、これらの疑問が次々に湧いてくる。

そこで本稿では、まず白居易を始めとして主に中唐における詩文小説に登場する天宝遺民の実態を、それぞれの作品に拠つて具体的に検証しながら、中唐の詩人が抱いていた天宝時代像について探つてみることにする。そしてその一環として、天宝遺民たる「康叟」の伝記を、特に康洽、康崑崙について洗い直してみたいと思うのである。

白居易詩には、開元天宝の遺民が白居易の現実の對話者として登場し、玄宗楊貴妃の盛時を物語るといふ設定の詩例が顕著に見られる。

江南遇天寶樂叟⁽³⁾ 江南に天宝の楽叟に遇ふ

白頭病叟泣且言 白頭の病叟 泣き且つ言ふ

禄山未亂入梨園 禄山未だ乱れざるとき 梨園に入り

能彈琵琶和法曲 能く琵琶を弾じて法曲に和し

多在華清隨至尊⁴ 多く華清に在りて至尊に隨ふ

是時天下太平久 是の時 天下太平なること久しく

年年十月坐朝元 年年十月 朝元に坐す

千官起居環珮合 千官起居して環珮合し

萬國會同車馬奔⁸ 万国会同して車馬奔^{はし}る

金鉞照耀石甕寺 金鉞照耀す 石甕寺

蘭麝薰煖温湯源 蘭麝薰煮す 温湯源

貴妃宛轉侍君側 貴妃は宛転として君側に侍し

體弱不勝珠翠繁¹² 体弱くして珠翠の繁きに勝^たへず

白居易と天宝の遺民（竹村）

冬雪飄飄錦袍煖

冬雪飄飄として錦袍煖くあたか

春風蕩漾霓裳翻

春風蕩漾して霓裳翻るひるがへ

歡娛未足燕寇至

歡娛未だ足らざるに燕寇至り

弓勁馬肥胡語喧 16

弓勁く馬肥え 胡語喧しかまびす

幽土人遷避夷狄

幽土人遷り 夷狄を避け

鼎湖龍去哭軒轅

鼎湖龍去り 軒轅を哭す

從此漂淪到南土

此より漂淪して南土に到り

萬人死盡一身存 20

万人死し尽して一身存す

秋風江上浪無限

秋風の江上に浪限り無し

暮雨舟中酒一樽

暮雨の舟中に酒一樽

涸魚久失風波勢

涸魚久しく失す 風波の勢

枯草曾沾雨露恩 24

枯草曾て沾ふ 雨露の恩うるほ

我自秦來君莫問

我秦より来れり 君問ふこと莫れ

驪山渭水如荒村

驪山 渭水 荒村の如し

新豐樹老籠明月

新豐の樹は老いて明月を籠めこ

長生殿閨鎖黃昏 28

長生殿は閨く 黃昏に鎖すく

紅葉紛紛蓋敬瓦

紅葉は紛紛として敬ける瓦を蓋ひおほ

綠苔重重封壞垣

綠苔は重重として壞れし垣を封ずこわ

唯有中官作宮使

唯だ中官の宮使と作る有りてな

毎年寒食一開門 毎年寒食に一たび門を開くのみ

この詩において、白居易が江南で出遇った音楽叟は、今や白髪で病気がちの天宝の遺民である。その涙ながらに青春の思い出を語るのを聞けば、彼は天宝の盛時にあって、玄宗の梨園の琵琶の名手であった。年年十月には華清宮で歛娛の時を過す玄宗や楊貴妃に扈從して驪山におもむいたのである。やがて安祿山の乱が勃発すると、玄宗一行は急遽西蜀へ蒙塵し、最大の庇護者を失った彼は、やむなく旅芸人として江南を流浪する破目におちいる。その彼の語る繁榮と没落の回顧談を聞いて、やはり長安から江州へ貶謫されて来た白居易は、長安の梨園や驪山の華清宮の荒廢した現状について、自分の目睹したことをいろいろと老樂叟に語って聞かせるのである。杜甫の「江南逢李龜年」詩をモチーフとして作られたと思われるこの詩からは、先の「贈康叟」詩と同様に、共に故郷の長安を逐われ、異郷を流浪する者同仕が持つ無限の連帯感と、白居易の天宝遺民に対する無量の憧憬の念とを読み取ることができる。

梨園弟子 梨園の弟子⁽⁴⁾

白頭垂涙話梨園 白頭 涙を垂れて梨園を語る^{かた}

五十年前雨露恩 五十年前 雨露の恩

莫問華清今日事 問ふ莫かれ 華清今日の事

滿山紅葉鎖宮門 滿山の紅葉 宮門を鎖す^{とま}

この詩は、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』⁽⁵⁾綜合作品表によれば、長慶二（八二二）年、長安での作品である。

この年、白居易は杭州刺史として長安から杭州へ赴任する。この詩に登場する旧梨園弟子が、もし今も長安又はその

白居易と天宝の遺民（竹村）

近郊に在住しているのであれば、第三句「華清の今日の事」について幾分かを既に知見しているはずであり、この詩の詩意にふさわしくない。この梨園弟子は、もし現実の天宝遺民であるとすれば、長安を遠く離れた異郷を流浪するのが通例のパターンである。或いはこの詩は、白居易が杭州あたりで見かけた天宝遺民の梨園弟子を詠んだものであろうか。この詩もやはり、今は白髪となった梨園弟子の「五十年前」の天恩について述べる。詩意は前詩「江南遇天宝楽叟」と全く同様であり、前詩形を短かく七言絶句に縮めた体裁になっている。

白頭病叟泣且言。 祿山未亂入梨園。↓白頭垂淚話梨園。

枯草曾沾雨。露恩。 ↓五十年前雨露恩。

我自秦來君莫問。 ↓莫問華清今日事。

長生殿闔鎖黃昏。紅葉紛紛蓋敬瓦。↓滿山紅葉鎖宮門。

など、その詩語表現も多く前詩を襲用している。

次に、新樂府の「新豊折臂翁」に登場する、徵兵を忌避して自らの意志で右腕を折った老翁もやはり天宝の遺民である。

新豊老翁八十八 新豊の老翁 八十八

頭鬢眉鬚皆似雪 頭鬢眉鬚 皆雪の似し

玄孫扶向店前行 玄孫に扶へられ 店前に向って行く

左臂憑肩右臂折 左臂は肩に憑り 右臂は折る

問翁臂折來幾年

問ふ 翁臂折れて來り幾年ぞ

兼問致折何因緣

兼ねて問ふ 折るを致すは何の因緣ぞ

翁云貫屬新豐縣

翁云ふ 貫は新豐県に屬し

生逢聖代無征戰

生れて聖代に逢ひ 征戰無し

慣聽梨園歌管聲

梨園の歌管の声を聴くに慣れ

不識旗槍與弓箭

旗槍と弓箭とを識らず

無何天寶大徵兵

何くも無く 天寶大いに徵兵し

戸有三丁點一丁

戸に三丁有れば一丁を点す

點得驅將何處去

点し得て驅り將て 何処にか去く

五月萬里雲南行

五月 万里 雲南に行く

……

……

是時翁年二十四

是の時 翁 年は二十四

兵部牒中有名字

兵部の牒中に名字有り

夜深不敢使人知

夜深くて敢て人をして知らしめず

偷將大石鎚折臂

偷かに大石を將て 鎚ちて臂を折る

張弓鑊旗俱不堪

弓を張り 旗を鑊る 俱に堪えず

從茲始免征雲南

茲より始めて雲南に征くを免かる

骨碎筋傷非不苦

骨碎け筋傷るるは苦しからざるに非ざれど

且圖揀退歸郷土

且つ揀び退けられて郷土に歸らんことを図るなり

臂折來來六十年 臂折れて來來六十年このかた

一肢雖廢一身全 一肢は廢すと雖も一身は全し

……

……

この詩は元和四（八〇九）年に作られた。天宝十載（七五一年）、楊国忠が雲南の南詔蛮を伐つたために、人民を強いて徴兵した史実を背景にする。「是時翁年二十四」であるとするれば、この折臂翁は開元十八（七二八）年生まれとなり、この詩が詠まれた年には八十二歳を数える。第一句「新豊老翁八十八」とあるのに、やや年齢のひらきが生じる。諸本では、敦煌本が「新豊老翁年八十」とあるのが、より正確な表現となる。そのリアルな描写からすると、この開元生まれの老翁は、白居易が現実に対面し、直接に会話を交した相手であると考えるのが妥当である。白居易がこの老翁に問いかける親身で懇切な態度には、新樂府の題下に付した「辺功を戒むるなり」という主題とは別に、彼の天宝遺民に対する格別の篤い感情があらわれていると見ることが出来る。

また、同じく新樂府の「上陽白髮人」⁽⁹⁾も、中唐に生きる天宝の遺民を詠んだ新樂府である。

上陽人

上陽の人

紅顏暗老白髮新 紅顏暗に老い 白髮新たなり

綠衣監使守宮門 綠衣の監使 宮門を守る

一閉上陽多少春 一たび上陽に閉とまりてより多少いくばくの春ぞ

玄宗末歲初選入 玄宗の末歲 初めて選えらばれて入る

入時十六今六十 入りし時は十六 今は六十

同時採擇百餘人
同時に採択せらるるもの百余人
零落年深殘此身
零落し 年深^ふけて 此の身を殘すのみ

……

……

鶯歸燕去長悄然
鶯歸り 燕去り 長^{とくしえ}に悄然たり

春往秋來不記年
春往き 秋來たり 年^{おと}を記えず

唯向深宮望明月
唯だ深宮に向つて明月を望めば

東西四五百廻圓
東西 四五百廻圓^{まどか}なり

今日宮中年最老
今日 宮中に年最も老い

大家遙賜尚書號
大家^{みかど}は遙かに尚書の号を賜ふ

小頭鞋履窄衣裳
小頭の鞋履 窄^{せま}き衣裳

青黛點眉眉細長
青黛眉を点じ 眉は細長なり

外人不見見應笑
外人は見ず 見れば^{まさ}応に笑ふべし

天寶末年時世粧
天寶末年の時世粧

……

……

この詩に詠まれる、上陽宮をひっそりと守る白髪の宮女は、曾て天寶十四載（七五五年）、十六歳の時にめでたく、宗の宮殿にあげられた。ところが、楊貴妃が帝の寵愛を専らにしたために（實際は安祿山の乱のために）、一度も進幸されることなく、却って疎んじられ、上陽宮に幽閉されて空しく青春の日々を費消する。今は六十一歳。もし「玄宗末歳」すなわち天寶十四載（七五五年）に本当に十六歳であったとすれば、この詩が作られた元和四（八〇九）年に

は、正しくは六十九歳、もしくは七〇歳の高齢を数えることになる。当時の仲間は既にいなくなり、彼女はただ一人上陽宮に残る生涯を送っている。その服装や化粧は、今では全く流行おくれの所謂「天宝末年の時世粧」である。

そして、その題下注に、

天寶五載已後、楊貴妃專寵、後宮人無復進幸矣。六宮有美色者、輒置別所、上陽是其一也。貞元中尚存焉。

とあるのは、中唐の貞元年間に至っても天宝の上陽宮が尚存在し、その様な天宝遺民たる「上陽白髮人」が尚まだ生存していたことの何よりの証拠である。(同題の「上陽白髮人」は、また同様のテーマで元稹の新題樂府にも詠まれている。)

また、「春題華陽觀」^{(10)(補1)}詩は、華陽公主の故宅に題した詩であるが、その自注に「觀即華陽公主故宅、有舊内人存焉。」とあり、やはり白居易の当時であって、「旧内人」「頭白宮人」たる天宝の遺民が生存していたことが明記されている。

帝子吹簫逐鳳凰 帝子 簫を吹き 鳳凰を逐ふ

空留仙洞號華陽 空しく仙洞を留めて華陽と号す

落花何處堪惆悵 落花 何れの処か惆悵に堪へん

頭白宮人掃影堂 頭白の宮人 影堂を掃ふ

更に、白居易の開元天宝時代への思慕は、如上の遺民を介してのみに限らず、老柳や樂曲など、天宝時代の息吹き

を伝える多くの文物に直接接することによっても、一層の啓発を受けた様である。例えば、「勤政樓西老柳」詩は、玄宗が熱心に政務を執った勤政務本樓の西に植わっている開元以来の老柳について、格別の感慨を記したものである。

半朽臨風樹 半ば朽ちたり 風に臨む樹

多情立馬人 多情なり 馬を立つる人

開元一株柳 開元の一株の柳

長慶二年春 長慶の二年の春

続いて、「嵩陽觀夜奏霓裳」詩では、嵩陽觀において秋夜に演奏された「霓裳羽衣曲」について、河南尹たる白居易「白尹」は、その「開元遺曲」たることをひとしお「愛」おしんでいる。

開元遺曲自淒涼 開元の遺曲 自ら淒涼

況近秋天調是商 況んや秋天に近く 調は是れ商なるをや

愛者誰人唯白尹 愛しむ者は誰人ぞ 唯だ白尹なり

奏時何處在嵩陽 奏する時は何処ぞ 嵩陽に在り

……

……

この霓裳羽衣曲は、玄宗と楊貴妃の逸楽を伝える開元天宝の遺曲である。この「開元遺曲」という表現には、開元遺民と同じく、その時代の息吹きを伝える遺物に対する白居易の特別な感懐があらわれていると考えられる。白居易

にはこの他に、「元稹詩に和した「霓裳羽衣歌」⁽¹³⁾があるほか、「宅西有流水、牆下搆小樓、臨玩之時、頗有幽趣。因命歌酒、聊以自娛。獨醉獨吟、偶題五絶」⁽¹⁴⁾詩其三においては、「皆言此處宜絃管、試奏霓裳一曲看」とあり、宴席に興趣を添えるものとして、白居易が特に望んで霓裳羽衣曲を一曲演奏したことがわかる。

次に、「感白蓮花」⁽¹⁵⁾詩において、白居易が江南から洛陽に移し植えた白蓮花を詠みながら、突如として西涼州の「天宝民」を連想するのは、やはりこの時代に、その様な天宝の遺民が、西涼の辺境とは言え、実際に存在していたことの反映であろう。

忽想西涼州 忽ち想ふ 西涼州

中有天寶民 中に天宝の民有りて

埋歿漢父祖 漢の父祖を埋歿し

孳生胡子孫 胡の子孫を孳生するを

そして最後に、有名な「長恨歌」⁽¹⁶⁾や「琵琶引」⁽¹⁷⁾において、次の如く、曾て盛唐の長安で活躍した妓女や梨園弟子が登場するのも、やはり当時白居易の身近に天宝遺民が生存していた状況を忠実に反映したものであると考えられる。

梨園弟子白髮新 梨園の弟子 白髮新たなり

椒房阿監青娥老 椒房の阿監 青娥老いたり

(長恨歌)

元和十年、予九江郡司馬に左遷さる。明年秋、客を湓浦口に送るに、舟船中に夜琵琶を弾く者を聞く。其の

音を聴くに、鏗鏘然として京都の声有り。其の人を問ふに、本と長安の倡女にして、嘗て琵琶を穆、曹の二善才に学ぶ、年長けて色衰へ、身を委ねて賈人の婦と為ると。

……

……

自言本是京城女 自ら言ふ 本は是れ京城の女にして

家在蝦蟇陵下住 家は蝦蟇陵下に在りて住む

十三学得琵琶成 十三にして琵琶を学び得て成り

名屬教坊第一部 名は教坊の第一部に属す

……

……

(琵琶引)

その他、白居易が李白、杜甫、あるいは韋忠物(補と)に言及した詩文も、彼の盛唐観を見る上で恰好の参考資料となるが、この点については、既に考察されているので、ここでは繰り返さない。

以上あげた多くの挙例から、中唐の白居易の時代に、盛唐の天宝の遺民がまだ現実に生存していたことが裏付けられる。そして白居易は、それらの遺民を通して、開元天宝時代の繁栄の息吹きを直接に感じ取り、もはや過ぎ去った盛時に対して限らない憧憬の念を抱いていることがわかる。或いは杜甫の如く、盛唐の安祿山の乱の渦中に現実に生きた詩人であったならば、その失われた盛時への追憶は、今少し異なった様相を呈していたかも知れない。⁽¹⁹⁾しかし盛唐より一世代も二世代も隔てた中唐時代を生きた白居易にとって、盛唐は、連続する唐朝の一部分とはいいながら、既に完全に過ぎ去った偉大な繁栄として追憶される対象であった様に察せられるのである。

中唐の他の文人の詩文においても、白居易と同じく、天寶の遺民が榮枯盛衰の語り部となって詩文中に登場する例がしばしば見られる。ここでは、その顕著な例を、元稹、劉禹錫、鄭嵎等の詩文について見ておきたいと思う。

まず、白居易と終生変わらぬ無二の親友であった元稹の「行宮」⁽²⁰⁾詩では、

寥落古行宮 寥落す 古行宮

宮花寂寞紅 宮花 寂寞として紅し

白頭宮女在 白頭の宮女在りて

閑坐説玄宗 閑坐して玄宗を説く

という様に、今は亡き玄宗の語り部として行宮に仕える天寶遺民の白髪の宮女が登場する。

また、「連昌宮詞」⁽²¹⁾では、

宮邊老翁爲余泣 宮辺の老翁 余が為に泣く

小年進食曾困入 小年 進食し 曾て困りて入る

という設定が物語るように、連昌宮の近くに住む老人が、「小年」の頃に「進食」のために宮中に入り、その眼でま

のあたりに見た玄宗や楊貴妃のきらびやかな生活の様子を詩の前半に描く。そして、後半では、安祿山の乱を経て、今は見る影もなく荒れ果てた連昌宮の惨状が述べられる。この連昌宮の栄枯盛衰を物語る老人は、やはり天宝の遺民である。

更に、「代曲江老人百韻」⁽²²⁾詩に登場する老人も、

何事花前泣　何事ぞ　花前に泣く

曾逢舊日春　曾て逢ふ　旧日の春

先皇初在鎬　先皇　初め鎬に在りしとき

賤子正遊秦　賤子^{わかれ}　正に秦に遊ぶ

という歌い出しからもわかる様に、その若い頃に玄宗と楊貴妃を眼のあたりにしたという体験を持つ天宝の遺民であると考えられる。

次に、鄭嶠の「津陽門詩」⁽²³⁾は、その序に、

今年冬、自虢而來、暮及山下。因解鞍謀餐、求客旅邸。而主翁年且艾、自言世事明皇。夜闌酒餘、復爲嶠道承平故實。翼日、於馬上輒裁刻俚叟之話。爲長句七言詩、凡一千四百字、成一百韻止。

とある様に、華清宮の北闕である津陽門の近くに旅宿をとった鄭嶠が、宿の老翁の語る天宝盛時の故事を一百韻の七言律詩にまとめたものである。大中五（八五一）年の進士である鄭嶠が対面した老翁が、果して百年近くも前の天宝

の遺民そのものであったのか、なお疑問の余地はあるが、老翁の語り口は当事者としての真実味があり、天宝時代の生き証人としての迫真性がある。

また、清の褚人穫の『堅瓠八集』⁽²⁵⁾巻二「琵琶詞」には、梨園の旧籍で琵琶を善くする老姫に遇った驚きを述べた呉彦高の「春従天上来」詩を載せるが、この老姫も天宝の遺民といふべきであろう。

更に、唐代伝奇小説『東城老父伝』に登場する鬪雞の名手賈昌は、開元五年生まれの九八歳、鬪雞を好んだ玄宗の故事を述べ立てるが、やはり開元天宝の遺民である。

最後に、宋・張俞の「驢山記」⁽²⁶⁾においては、驢山のふもとに住む九十三歳の老翁が、秘伝の「驢山宮殿図」を前にして、玄宗と楊貴妃の故事を物語るが、その遠祖は、曾て守宮使として天宝の宮中に入りしのであった。

以上、中唐以後の詩文小説に見られる天宝遺民の記述についてみてきた。とりわけ白居易や元稹を含む中唐の文人にとっては、安祿山の乱を経てなお生き残る天宝遺民の存在が、盛唐繁栄の息吹きを直接に伝えるよすがとして尊崇の対象であったことがよくわかる。遺民とは、ある時代が滅びて後、なお生き残る民人の謂である。いつ如何なる世にあっても、時移り、人類の興亡が繰り返されるかぎり、遺民は、あたかも淀みに浮かぶ泡沫うたかたのように、次から次に出現しては消え去ってゆく。そして、興亡が劇的であり、加えて前王朝の繁栄と没落がいちじるしいほど、激流にあらがう泡沫にも似て、遺民の存在は大きくクローズアップされる。果てなく民族の興亡を繰り返した中国において、魏晋南北朝や明清の鼎革の際に出現した多数の遺民の存在もまた然りである。

安祿山の乱は、唐朝の内乱であり、唐王朝がこのことによって俄に滅亡したわけではないが、玄宗の西蜀蒙塵という事態は、確かに唐朝存亡の一大危機であった。その後の唐朝は、もはや開元天宝時代の繁栄を二度と取りもどすことはなく、時は中唐から晩唐へと移行してゆく。その意味からすれば、安祿山の乱は、優に政治革命にも匹敵するほどの甚大な影響を唐王朝に与えた一大政変であったと言える。以上に見た様な中唐以後の文人が記録する天宝遺民の

存在も、天室の繁栄が顕著であり、安祿山の乱が劇的であったればこそ、より顕著に詠詩の対象として文人の眼にうつったものらしく思われる。

四

康洽の伝記のうち、比較的まとまったものは、元・辛文房の『唐才子伝』巻四に載せる次のような記事である。

洽、酒泉人。黄鬚美丈夫也。盛時攜琴劍來長安、調當道、氣度豪爽。工樂府詩篇、宮女梨園、皆寫於聲律。玄宗亦知名、嘗歎美之。所出入皆王侯貴主之宅、從遊與宴、雖駿馬蒼頭、如其已有。觀服玩之光、令人歸欲燒物、憐才乃能如是也。後遭天寶亂離、飄蓬江表。

至大曆間、年已七十餘、龍鐘衰老、談及開元繁盛、流涕無從。往來兩京、故侯館榭空、咸陽一布衣耳。於時文士願與論交、李端逢之、贈詩云、「聲名常壓鮑參軍、班位不過楊執戟」。又云、「同時獻賦人皆盡、共壁題詩君獨在」。後卒杜陵山中。文章不得見矣。

この記事からわかることは、康洽が西域酒泉出身の黄鬚の美丈夫であったこと、音楽や劍術に巧みであったこと、玄宗の盛唐時に長安にやって来て王侯貴族の邸宅に出入りしたこと、安祿山の乱後は江表に流浪したこと、大暦年間に七十餘歳、開元の盛時を語っては涙にくれたこと、李端など時の文士と交わって贈答詩を残すこと、等等である。しかし、これは小川昭一によって既に指摘されたように、唐詩中に見える康洽を詠んだ以下の三詩の詩表現を、適当につき合せて作成した合成記事であるにすぎない。

更に、最近では、譚嘉定『中国文学家大辞典』⁽²⁸⁾に次のように記述するのも同様である。

康洽（約公元七四二年前后在世）字不詳，酒泉人。生卒年均不詳，約唐玄宗開元、天寶間前后在世。氣度豪爽，美風姿，蓄黃鬚。攜琴劍至長安，謁見當道。工樂府詩篇，宮女梨園，皆寫入聲律。玄宗亦知其名，深加嘆美。所出入皆王侯貴主之宅，從遊與宴，雖駿馬蒼頭，如其已有。天寶之亂，飄泊江表。至大歷間，年已七十餘，龍鐘衰老，每談及開，天繁盛，流涕不知所從。常往來兩京，文士樂與之交。後卒杜陵山中。

次に、これらの康洽伝の原資料になったと思われる、全唐詩中の康洽を詠んだ詩例について検討してみることにする。その詩例は次の三例である。⁽²⁹⁾

a 李頎「送康洽入京進樂府歌」（全唐詩卷一三三）

b 戴叔倫「贈康老人洽」（全唐詩卷二七四）

c 李端「贈康洽」（全唐詩卷二八四）

まず、a 李頎「送康洽入京進樂府歌」は次の様である。

識子十年何不遇 子を識ること十年 何ぞ不遇

只愛歡遊兩京路 只だ歡遊を愛す 兩京の路

朝吟左氏嬌女篇 朝に吟ず 左氏の嬌女篇

夜誦相如美人賦 夜に誦す 相如の美人賦

長安春物舊相宜 長安の春物 旧もと相宜し

小苑蒲萄花滿枝 小苑の蒲萄 花 枝に滿つるならん

柳色偏濃九華殿 柳色偏ひとへに濃し 九華殿

鶯聲醉殺五陵兒 鶯聲醉殺す 五陵兒

曳裾此日從何所 此の日より曳裾して 何所に從はん

中貴由來盡相許 中貴は由來 尽く相許す

白袂春衫仙吏贈 白袂・春衫は仙吏の贈るなり

烏皮隱几壹郎與¹² 烏皮・隱几は台郎与へたり

新詩樂府唱堪愁 新詩樂府 唱ひて愁うるに堪へたれば

御妓應傳鷓鴣樓 御妓 應まさに鷓鴣樓に伝ふべし

西上雖囚長公主 西上するは長公主に囚ると雖も

終須一見曲陵一作陽侯 終須つひに曲陵 一作陽侯に一見すべし

この詩は、その標題からわかるように、康洽が西京長安に入って、「長公主」に「新詩樂府」を進上するのを見送った詩である。作者の李頎は、『唐才子伝』卷二によれば、開元二十三（七三五）年の進士であるが、この詩がいつ頃作られたかは不明。句中に第二句「歡遊兩京路」、第五句「長安」、第十五句「西上」とあるのからすれば、東都洛陽において詠まれたものと思われる。王士禛『帶經堂詩話』卷十五には、『古夫于亭雜錄』卷五を引いて次のようにあり、第十五句「長公主」や末句の「曲陽侯」が、秦国夫人、虢国夫人、楊国忠の輩を指すものとしている。

盛唐詩人多有贈康洽之作、最傳者李頎所謂「西上雖囚長公主、還須一見曲陽侯」、蓋指楊国忠暨秦、虢輩也。

また、先にあげた『唐才子伝』や『中国文学家大辞典』の記事が、李頎のこの詩の表現に拠って、「往来両京」の時期を安祿山の乱後のことにしているのは誤りである。

いづれにせよ、この詩は、李頎と識り合つて十年来、布衣のまま両京（長安、洛陽）を歓遊していた康洽が、このたび「長公主」のみちびきで一躍その新詩楽府を認められ、宮中に進上するべく、「此の日」に「西上」するのを見送った詩である。康洽を詠んだ他の二詩が、いづれも安祿山の乱後に天下を流浪する「遺民」の康洽を描くのに較べ、李頎のこの詩は、時代の脚光を浴びてまさに上京しようとする康洽を見送った詩であり、開元時代の鬱勃たる雰囲気が見える好個の同時代資料としても重要である。

次に、b戴叔倫「贈康老人洽」は次の様である。

酒泉布衣舊才子

酒泉の布衣 旧才子

少小知名帝城裏

少小より名を知らる 帝城の裏うち

一篇飛入九重門

一篇飛びて九重の門より入れば

樂府喧喧聞至尊

楽府喧喧として至尊に聞こゆ

宮中美人皆唱得

宮中の美人 皆唱ひ得たり

七貴因之盡相識

七貴 之に因りて尽く相識る

南鄰北里日經過

南鄰北里 日に経過ひびし

處處淹留樂事多

処処に淹留して樂事多し

不脱弊裘輕錦綺

弊裘を脱せず 錦綺を軽んじ

長吟佳句掩笙歌

長吟の佳句 笙歌を掩ふ

賢王貴主於我厚 賢王貴主 我に於て厚く

駿馬蒼頭如己有¹² 駿馬蒼頭 己の有するが如し

暗將心事隔風塵 暗に心事を將て風塵に隔てられ

盡擲年光逐杯酒 尽く年光を擲ちて杯酒を逐ふ

青門幾度見春歸 青門に幾度か春の歸るを見

折柳尋花送落暉¹⁶ 柳を折り 花を尋ね 落暉を送る

杜陵往往逢秋暮 杜陵 往往にして秋暮に逢ひ

望月臨風攀古樹 月を望め 風に臨み 古樹を攀づ

繁霜入鬢何足論 繁霜鬢に入る 何ぞ論ずるに足らん

舊國連天不知處²⁰ 舊國は天に連なり 処を知らず

爾來倏忽五十年 爾來 倏忽として五十年

卻憶當時思眇然 卻って當時を憶へば 思は眇然たり

多識故侯悲宿草 多く識る 故侯の宿草を悲しむを

曾看流水没桑田²⁴ 曾て看る 流水の桑田を没するを

百人會中一身在 百人會中 一身のみ在り

被褐飲瓢終不改 褐を被 瓢を飲み 終に改めず

陌頭車馬共營營 陌頭に車馬 共に營營たり

不解如君任此生²⁸ 解らず 君の如く此の生を任にするを

前半の十二句は、康洽の樂府の名声が玄宗にまで聞え、長安中にもはやされたことを言う。第十三句「風塵」は安祿山の兵乱を指す。康洽の人生上における一大激乱であり、詩意もここで大きく転換する。第十二句「駿馬蒼頭如己有」は、『唐才子伝』『中国文学家大辞典』に共に引用される。第十七句に「杜陵往往逢秋暮」とあるのは、晩年に杜陵に住んだことを指すか。『唐才子伝』『中国文学家大辞典』には「(後)卒(於)杜陵山中」という。

第二十一句に「爾來倏忽五十年」とあるのは、康洽が樂府の作者として時代の脚光を浴びて(前半十二句)以来、五十年ということであろうと思う。戴叔倫は七八九年に五十八歳で没しており、もしこの「五十年」を安祿山の乱(七五六年)後、五十年というのでは、年数の勘定が合わない。康洽が一体いつ長安に上ったのか定かではないが、この詩句は、それ以来五十年という意味である可能性が大きい。だとすれば、先にあげたa李頎「送康洽入京進樂府歌」からほぼ五十年後に、戴叔倫のこの詩「贈康老人洽」が作られたことになる。幾星霜を経て既に高齢を迎えた康洽は第十九句に言う「繁霜入鬢」そのままである。いづれにせよ、この詩において、康洽は既に白髪を冠した往年のスターとなっており、巷間で曾ての開元天宝時代「當時」の繁栄を「眇然」に回憶しているのである。

最後に、c李端「贈康洽」詩は次のようである。

黄鬚康兄酒泉客 黃鬚の康兄は酒泉の客

平生出入王侯宅 平生出入す 王侯の宅

今朝醉臥又明朝 今朝醉ひ臥し 又明朝

忽憶故鄉頭已白⁴ 忽と故郷を憶へば 頭已に白し

流年恍惚瞻西日 流年 恍惚として西日を瞻め

陳事蒼茫指南陌 陳事 蒼茫として南陌を指す

聲名恆壓鮑參軍

聲名は恒に鮑參軍(照)を圧し

班位不過揚執戟⁸

班位は揚執戟(雄)を過えず

邇來七十遂無機

邇來七十 遂に機無く

空是咸陽一布衣

空しく是れ咸陽の一布衣

後輩輕肥賤衰朽

後輩は輕肥して 衰朽するを賤しみ

五侯門館許因依¹²

五侯の門館 因依するに許す^{まか}

自言萬物有移改

自ら言ふ 万物に移改する有りと

始信桑田變成海

始めて信ず 桑田變じて海と成るを

同時獻賦人皆盡

時を同じくして賦を獻するは 人皆盡き

共壁題詩君獨在¹⁶

壁を共にして詩を題するは 君独り在り

步出東城風景和

東城より步出すれば 風景和し

青山滿眼少年多

青山 滿眼 少年多し

漢家尚壯今則老

漢家の尚壯 今は則ち老い

髮短心長知奈何²⁰

髮短く 心は長く 奈何すべきを知らん

華堂舉杯白日晚

華堂に杯を挙げ 白日晩る

龍鐘相見誰能免

龍鐘して相見る 誰か能く免れん

君今已反我正來

君今已に反り 我正に來たり

朱顏宜笑能幾回²⁴

朱顏宜しく笑ふべし 能く幾たびか回らんや

借問朦朧花樹下

借問す 朦朧たる花樹の下

第九句に「邇來七十遂無機」とあるのは、長安に上って以来七十年、すなわち、a 李頎の前詩より七十年後、b 戴叔倫の前詩より更に二十年後のことを指すものと思われる。『唐才子伝』及び『中国文学大辞典』に「至大曆間、年已七十余、龍鐘衰老」とあるのは、この第九句「邇來七十」という表現から来たものらしく思われる。(第二十二句にも「龍鐘相見」とある。)しかし、李端のこの原詩の詩意は、決してそういう意味には受け取れない。これは、辛文房や譚嘉定が述べる様に、康洽の生誕来七十年という年齢を言うのではなく、康洽が長安で華やかにスターとしてデビューして以来七十年間という期間の意味に解釈する方が妥当である。もし、これを康洽生誕来七十年と解するのであれば、原詩の次に続く「遂無機」(遂に出世の機会が無く)という表現が、その後スターとしてデビューした康洽の経歴と齟齬することになる。従って、この詩における康洽の年令は、実際にはデビュー当時の康洽の年齢が加算されることになる。例えば、当時二十歳であれば、この時九十歳という具合にである。辛文房『唐才子伝』及びそれを襲った譚嘉定『中国文学大辞典』が、李端詩を率爾に誤読したものの様に思われる。

とまれ、以上にあげた李頎「送康洽入京進樂府歌」、戴叔倫「贈康老人洽」、李端「贈康洽」の三詩を相互に比較検討すれば、酒泉から来た黄鬚の芸人康洽が、玄宗の開元天宝時に長安において一躍スターとなった経緯、そして安祿山の乱後は天下を漂流しつつ、中唐の大曆年間に至っても、なお高齢で天宝の遺民として生存していた史実が判明する。

次に、この康洽とほぼ時を同じくして、京師長安には、同姓の康崑崙という楽師が登場する。唐・段安節の『樂府雜録』⁽³⁰⁾琵琶の條に次の様に記録する。

貞元中有康崑崙、第一手。始遇長安大旱、詔移兩市祈雨。及至天門街、市人廣較勝負、及鬪擊樂。卽街東有康崑崙、崑崙琵琶最上、必謂街西無以敵也、遂請崑崙登綵樓、彈一曲新翻羽調錄要。其街西亦建一樓、東市大誦之。及崑崙度曲、西市樓上出一女郎、抱樂器、先云：「我亦彈此曲、兼移在楓香調中。」及下撥、聲如雷、其妙入神。崑崙卽驚駭、乃拜請爲師。女郎遂更衣出見、乃僧也。蓋西市豪族、厚賂莊嚴寺僧善本、以定東鄺之勝。翊日、德宗召入、令陳本藝、異常嘉獎、乃令教授崑崙。段奏曰：「且請崑崙彈一調。」及彈、師曰：「本領何雜！兼帶邪聲。」崑崙驚曰：「段師神人也！」臣少年初學藝時、偶於鄰舍女巫授一品絃調、後乃易數師。段師精鑑如此玄妙也！」段奏曰：「且遣崑崙不近樂器十餘年、使忘其本領、然後可教。」詔許之。後果盡段之藝。

これによると、貞元中（七八五—八〇四年、德宗時。『琵琶錄』は「建中中」に作る。これだと七八〇—七八三年、やはり德宗時）に、長安に康崑崙という琵琶の名手がいて、祈雨祭にかつぎ出されて、琵琶を弾いたところ、一方の段善本の妙芸に圧倒されて舌をまき、直ちに入門して教えを乞うたことがわかる。その康崑崙が自らの琵琶の来歴について語った中に、「臣少年初學藝時、偶於鄰舍女巫授一品絃調」とあり、また、段師が康崑崙の琵琶の技芸を評して、「本領何雜！兼帶邪聲」と述べていることは、康崑崙が西方康居国の出身であることを類推させる。このことは後述する。

この他、康崑崙にまつわる記事は、

唐・段安節『樂府雜錄』（胡部にもう一条言及する）

唐・李肇『唐国史補』卷中

唐・張固『幽閑鼓吹』

宋・王讜『唐語林』卷三

白居易と天竺の遺民（竹村）

宋・王灼『碧雞漫志』卷三

宋・歐陽修『新唐書』卷二十二、礼樂志十二

宋・李昉『太平広記』卷一八八、卷二〇五

明・胡震亨『唐音癸籤』卷四

清・王士禛『香祖筆記』卷三、卷七

清・胡鳳丹『馬嵬志』卷三

清・康熙中勅撰『古今圖書集成』卷一一四、樂律典

などの諸書に、その断片の記事を載せる。

いま、これらの康崑崙に関する記述を総合して考えてみると、康崑崙と康洽とは、共に一時に長安に名を馳せた同姓の楽師であったとは言え、どうも別人の様である。その理由として次の二点をあげる。

a 双方が活躍した時代にややずれがあること。康洽は盛唐玄宗の開元天宝年間に一躍名を知られ、安祿山の乱後は遺民として天下を流浪した。一方、康崑崙が有名になるのは、中唐徳宗の貞元（又は建中）年間であり、この間、数十年の時間の隔たりがあること。

b 康洽、康崑崙の各各の伝記記述を相互に比較検討しても、双方に一致する記事内容を全く見出せないこと。強いてあげれば、共に康姓で琵琶の楽師として著名であったことぐらいであるが、このことは、実はその出身と深い関係があるのであって、あらためて後述する。

さて、以上に検討して来た康洽と康崑崙に関する資料を見ると、私が冒頭に述べた白居易の「贈康叟」詩に登場する「康叟」が、康洽もしくは康崑崙その人であったとは、必ずしも断定できない。康洽については「八十秦翁」とい

う年齢勘定が合わなくなってくるし、康崑崙については、「天寶遺民」という呼称が相応しくないからである。そして何よりも、「康叟」という呼称は、「康のじいさん」というほどの一般称なのであって、李頎や戴叔倫、李端の詩題がそうであった様に、康洽だけを指す固有名称ではないからである。

このことからすると、王士禎が『帶經堂詩話』巻十五において、次の様に「康叟」を即康洽であると認定するのは誤りであるし、また、王士禎のこの記述に拠った私の前稿も正さなければならぬ。

盛唐詩人多有贈康洽之作、最傳者李頎所謂「西上雖因長公主、還須一見曲陽侯」、蓋指楊國忠暨秦、號輩也。後長慶中、白居易作忠州刺史、亦有贈康詩云：「殷勤憐汝無他意、天寶遺民見漸稀。」天寶至是已歷六朝、而康猶在、則祿山之亂、流落西蜀、至元和、長慶之時、亦已老矣。

五

ここでは、康洽、康崑崙を含む康姓を名のる者の多くが、西域の康国、つまりサマルカンド出身者であったことについて、若干の資料を紹介しつつ、贅説を加えることにする。

『旧唐書』巻一九八 西戎伝に、康国について次の記述がある。

康国、即漢康居之國也。……其人皆深目高鼻、多鬚髯。丈夫翦髮或辮髮。……人多嗜酒、好歌舞於道路。……善商賈、爭分銖之利。

白居易と天寶の遺民（竹村）

この記事から、康国人は多く鬚髯をたくわえ、飲酒を嗜み、路上に歌舞するのを好む陽気な芸人氣質があったことがわかる。

この様に歌舞を善くする康国人が、天宝末年に長安の宮中に献上されたことについては、白居易の新樂府「胡旋女」に、

胡旋女 胡の旋女

出康居 康居より出づ

の一句があり、その題下には、「天宝の末、康居国之を献す」との自注がある。(また、同題の元稹の新樂府「胡旋女」には、『李傳』に云ふ、天寶中、西國より來獻す。」と注する。)

更に、宋・錢易『南部新書』乙にも、次のような記載がある。

天寶末、康居國獻胡旋女、蓋左旋右轉之舞也。

いま、これらの康国出身の芸人の記述について考えてみると、康洽について、『唐才子伝』巻四に、

洽、酒泉人、黃鬚美丈夫也。盛時攜琴劍來長安。……工樂府詩篇、宮女梨園、皆寫於聲律。

とある記事と、見事に符号するのに驚く。このことは、康洽が康国出身の樂人であったことをほとんど確定する有力

な根拠となる。康崑崙についての伝記記述は乏しいが、先にあげた資料に見える断片的記事を総合して考えてみると、やはり康国出身の芸人であったとみて良いようである。

隋唐時代に中国に來住して活躍した康姓を名のる者の伝記、及びその故国である康国の地誌考証については、既に、主に東洋史研究者を中心に於いて強い関心が持たれて來た。すなわち、

○白鳥庫吉「鳥孫に就いての考」⁽³¹⁾

○白鳥庫吉「康居考」⁽³²⁾

○白鳥庫吉「粟特国考」⁽³³⁾

○羽田亨「漠北の地と康国人」⁽³⁴⁾

○桑原隲藏「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」⁽³⁵⁾

○石田幹之助「胡旋舞」小考⁽³⁶⁾

などに詳しい論証があり、また、專論として

○小川昭一「胡人康洽について」⁽²⁷⁾

がある。

ここで、西域の康国出身者が多く康姓を名のったということ、次の四氏の論述を掲げることによって示し、あわせて拙論の裏付けとしたい。

白居易と天宝の遺民（竹村）

○康国……中国、隋唐時代のサマルカンドの呼称。後世しばしばソグディアナの代名詞として用いられる。……中国や突厥に帰化した者も多く、それらはそれぞれ康姓を称し、東アジア文化圏にゾロアスター教、ソグド文字などのソグド文化を伝えた功績はとくに顕著である。
〔長沢和俊『アジア歴史辞典』「康国」〕

○支那の史書に康国の名が見えるやうに成つてから後、外国人で康姓を冠せられて居るものが、康国の人なるを示すものであることは、一般に認められて居ることで、疑ふべき余地は無い。
〔羽田亨「漠北の地と康国人」⁽³⁴⁾〕

○サマルカンド Samarkand は、支那で普通康国として知られ、この地の出身者は多く康姓を称した。

〔桑原隲藏「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」⁽³⁵⁾〕

○康洽は黄鬚の胡人であった。そして酒泉の人であった。康姓の胡人が康国出身、つまり今日のサマルカンド出身者であることは言うまでもない。彼を酒泉の人というのは、康国から酒泉に移住したという意味であろう。安祿山も元来は康姓であったという説^(補)があり、康姓の胡人の名は多く記録されている。その中には琵琶の名手と伝えられる康崑崙もあるが、前にも記したように詩人というのは洽一人である。
〔小川昭一「胡人康洽について」⁽²⁷⁾〕

いま、これらの記述を総合して結論的に考えると、康洽、康崑崙ともに、西域康国、つまりサマルカンド出身の芸人であったということになる。(私は更に、この両者の命名の由来について、次のように考える。つまり、崑崙は中国西方にそびえる靈峰であり、康崑崙が西方出身者であることを意味する。また、洽はうるおう、天恩にうるおうの意であり、康洽が玄宗のおぼえめでたかったことを示す。あたかも、後世、清朝は『紅樓夢』の作者曹霑が、康熙帝の天恩に感謝して命名されたが如くにである。しかし、これらは今のところまだ推測にすぎない。)

従つて、冒頭に私が引用した白居易の「贈康叟」詩に登場する「康叟」もまた、恐らくはこれらのサマルカンド出身の康姓を名のる芸人の一人であつて、先に述べた様に、康洽その人を特に指したのではない。ただ、「康

叟」が直ちに康洽、もしくは康崑崙その人ではないとは言っても、白居易の天宝遺民に寄せる篤い思いに変わりがなく、ことは言うまでもない。新樂府の「胡旋女」にも既に詠んだ様に、西域康国から唐都長安に献上され、華々しく活躍した康姓の芸人が、今や衰老して見る影もなく異国を漂浪している姿を見て、やはり都長安を逐われて異土をさまよう白居易は、そこに他人事とは思えない同情と共感を込めたものと思われる。

六

盛唐を代表する詩人杜甫（七一二—七七〇）最晩年の絶唱に、「江南逢李龜年」詩がある。

岐王宅裏尋常見　岐王の宅裏に尋常に見る

崔九堂前幾度聞　崔九の堂前に幾度か聞く

正是江南好風景　正是れ江南の好風景

落花時節又逢君　落花の時節に又も君に逢ふ

大曆五（七七〇）年暮春、杜甫五十九歳の作である。この詩で、杜甫は、少年時代にその盛名を聞見していた梨園の大スター李龜年に、幾十年の星霜を経た後、奇しくも江南の落花の好時節に再会した驚きと喜びを述べる。この間、安祿山の大乱を経て、李龜年及び杜甫の二人がどのような辛酸を嘗めつくしたか、この七絶は何も語らないが、末句「又」の一字がいかにも効果的に働き、余情尽きない古今の名篇となっている。

さて、ここで私が問題にしたいのは、天宝の遺民としての杜甫と李龜年の関係についてである。つまり、その人生

の晩年に、あたかもここ江南の「落花」の好時節に出逢った二人は、本論における私の設定に沿って言うならば、共に「天宝の遺民」であると考えられる。梨園の弟子たる李龜年がそうならば、杜甫もまた然りである。安祿山の乱によつて天下の形勢が一変し、生活の拠り所を失ったことは、その後の二人の人生をほとんど決定づけた。玄宗という最大のパトロンを失った李龜年は言うまでもない。杜甫は、玄宗時代になお不遇であったとは言え、やはり安祿山の乱が彼のその後の人生に与えた影響は深刻であった。

このような二人の相似た状況を反映してか、ここで奇しくも邂逅した二人には、実は落託した者同士がお互いに持つ共通の連帯感が生れてる様に思える。つまり、盛唐を代表する一芸人と一詩人とが、共に落託した「天宝の遺民」ということで互いに親近する意識を持ち得たと言えるのではなからうか。このことは、杜甫、李龜年ともに、何よりも盛唐に生きた文人であり、芸人であったことに起因する。この様に考えれば、杜甫の「江南逢李龜年」詩における李龜年と杜甫は、共に「天宝の遺民」として天下を漂流しながら、この時、中唐の中国にあって、なお現実に活動し、天宝の盛時を生き生きと具現していたと言つてよいように思うのである。

やがて、時世の移り変わりを象徴的に暗示する様に、杜甫がこの名詩を辞世の如くに詠んで没した大曆五（七七〇）年の翌翌年に、中唐を代表する詩人白居易（七七一—八四六）がこの世に生まれる。時は中唐であり、盛唐の繁栄は一世代も二世代も以前のこととして、既に過去の追憶となった頃合いである。白居易自身、正しく中唐の詩人なのであるが、その詩文には、「天宝の遺民」を介して、過ぎ去った盛唐への憧憬の念が至る処に現われている。「新豊折臂翁」然り、「上陽白髮人」然り、「長恨歌」「琵琶行」また然りである。

それでは、これらの詩に詠われる「天宝遺民」と白居易との関係は如何であろうか。共に天下を流浪する芸人であり、詩人であることは、杜甫の場合に酷似する。しかし、杜甫と明確に違ふのは、白居易の詩に登場する天宝遺民は、高齢ではあつても確かに天宝時代の生き証人であるが、それを見る白居易は天宝の生活経験が全く無い中唐の詩

人であることである。「梨園弟子」詩の場合、白頭の梨園弟子が涙ながらに語るのは、五十年前に受けた玄宗の天恩であるが、今やその梨園も華清宮も当時の機能は全く無い。現実には天宝時代とは完全に隔絶しており、白髪の梨園弟子は、「天宝遺民」として中唐においてまさしく残余の生活を送っているのである。このことは、「上陽白髮人」も同様であり、元稹の「古行宮」に登場する宮女もまた然りである。

そして、白居易が杜甫の「江南逢李龜年」詩に直接の発想を得て作られたと思われる「江南遇天宝楽叟」詩においても、白頭の病叟が涙ながらに語るのは、曾ての天宝時における梨園の盛事であり、今やその楽叟も驪山も当時の面影は全くない。つまり、ここに登場する「天宝の遺民」は、天宝の記憶裡には生きていても、中唐の現実裡には生きていないのである。中唐に生きた白居易が、盛唐の経験を伝聞でしか持っていないことは言うまでもない。

同様のことは、白居易の「贈康叟」詩にもそのまま当てはまる。この詩において、白居易は、近ごろ「天宝遺民」を滅多に見なくなったからこそ、彼に寒衣を与えた。この「康叟」は、白居易にとって天宝の盛時を追憶するよすがではあっても、当の「康叟」は、齢八十を越え、もはや「天宝の遺民」として機能的に生きてはいない。ただその残余の生涯を空しく異郷に費消しているばかりである。おそらく、李龜年の様に天宝の遺事を弾き語りすることもほとんどなかったであろう。

このようにして、私が本論で取りあげた白居易の「贈康叟」詩は、さりげなく書かれたごく平凡な七絶詩ではあるが、その「天宝の遺民」への尊崇を通して窺われる天宝時代への傾慕の念は、時世の推移上当然ながら、自ら盛唐時代を生きた杜甫とは本質的に異なっていると考えられる。

以上、縷縷述べ来たったことを、中国古来の歴史学の用語を借りてまとめらば、盛唐の杜甫は天宝遺民の中に天宝時代を見、中唐の白居易は天宝遺民を通して天宝時代を聞いたし、そして、その後の詩人は、今日に至るまで、天宝遺民の伝説を通して天宝時代を伝聞していると言い得ようか。

(一九八六年十月 福岡)

- (1) 『白居易集』卷十八(顧学頤校点 中華書局 一九七九年)。以下、白居易詩の引用はこの本を底本とし、適宜諸本を参照する。
- (2) 乞は給、与の意に解する。音は^レg。前稿「呉偉業『永和宮詞』における白居易『長恨歌』(および元稹『連昌宮詞』)の受容」(徳島大学教養部紀要第十七巻 一九八二年)に「乞はる」(音^レg)と読むのを改める。
- (3) 白居易集卷十二。
- (4) 白居易集卷十九。
- (5) 朋友書店 昭和四九年再版。
- (6) 白居易詩における「五十」の語は、単に五十歳という白居易の年齢を言う場合のほか、次の二通りの意味合いが考えられる。その一は安祿山の乱以来「五十年」、つまり楊貴妃没後「五十年」、言い代えれば盛唐の盛世が過ぎて後「五十年」、つまり実質的には八〇六年(憲宗元和元年)前後の中唐の一時期を指して言う場合であり、その二は、玄宗の治世「五十年」、つまり開元二十九年間と天宝十五年間をひっくりかえして凡そ「五十年」という場合との二通りである。この「梨園弟子」詩における「五十年前雨露恩」は前者の場合であり、後出の「胡旋女」詩における「五十年來制不禁」もやはりそうである。
- (7) 白居易集卷三。
- (8) 未見。白居易集卷三「新豐折臂翁」、注二。
- (9) 白居易集卷三。
- (10) 白居易集卷十三。
- (11) 白居易集卷十九。
- (12) 白居易集卷二七。那波本卷五七。汪本後集卷十一。
- (13) 白居易集卷二一。那波本卷五一。汪本後集卷一。
- (14) 白居易集卷三三。那波本卷六六。汪本後集卷十四。
- (15) 白居易集卷二九。那波本卷六二。汪本後集卷三。

(16) 白居易集卷十二。なお陳鴻「長恨歌伝」序には、「世所不聞者、予非開元遺民、不得知。」というように、「開元遺民」の語が用いられている。

(17) 白居易集卷十二。

(18) 前川幸雄「李白に対する白居易の気持」(漢文学 十三号 福井大 一九六九)、同氏「杜甫に対する白居易の気持」(古典と現代 十四号 明治書院 昭和四一年)。

(19) 杜甫において、安祿山の乱を契機にして、玄宗と楊貴妃に象徴される開元天寶時代への認識がどの様に変化していったのか興味あるテーマである。ここでは、関連する杜甫の詩題を以下に列記し、他日の構想に備える。

麗人行(全唐詩卷二一六)

自京赴奉先縣詠懷五百字(全唐詩卷二一六)

哀江頭(全唐詩卷二一六)

哀王孫(全唐詩卷二一六)

北征(全唐詩卷二一七)

病橘(全唐詩卷二一九)

光祿坂行(全唐詩卷二二〇)

憶昔二首、其二(全唐詩卷二二〇)

觀公孫大娘弟子舞劍器行(全唐詩卷二二二)

春望(全唐詩卷二二四)

秋興八首、其四(全唐詩卷二三〇)

驪山(全唐詩卷二三〇)

解悶十二首、其九、十二(全唐詩卷二三〇)

江南逢李龜年(全唐詩卷二三二)

千秋節有感二首、其一(全唐詩卷二三三)

虢国夫人(全唐詩卷二三四)

その他、李白を詠んだ十四首の詩篇(詩題は省略)

白居易と天寶の遺民(竹村)

(20) 全唐詩卷四一〇。一に王建の詩に作る。

(21) 全唐詩卷四一九。

(22) 全唐詩卷四〇五。二宮俊博「元稹の『代曲江老人百韻』詩について」(中国文学論集 第十一号 九州大学中国文学会 昭和五十七年) 参照。

(23) 全唐詩卷五六七にこの詩一首のみを収める。

(24) 鄭嶋が大中年の進士であることは『唐才子伝』巻七、『登科記考』巻二二、『全唐詩』巻五六七等の諸書に見える。また、『津陽門詩』中に、

開元より今に到るまで十紀を踰ゆ

当初の事跡は皆残穢せり

という表現があり、この詩が開元より「十紀」(百二十年) 以上も後に作られたことがわかる。因みに開元一と二九(七二一—七四一) 年より百二十年後は、大和七と咸通二(八三三—八六一) 年となる。

(25) 筆記小説大観第十五冊(江蘇広陵古籍刻印社 一九八三年) 二五五頁。

(26) 宋・劉斧『青瑣高議』巻六。

(27) 小川昭一『全唐詩雜記』(彙文堂 一九六九年) 所収「胡人康洽について」。

(28) 世界書局、一九七四年。

(29) 小川昭一は「胡人康洽について」の論文の中で、向達『唐代長安與西域文明』(三聯書店 一九五七年) 三二頁に言及する周智の「送康紹歸建業」詩(全唐詩卷五〇三) を、康洽を詠んだものに非ずとしてしりぞけているが(十頁)、私も小川説に賛同するものである。

(30) 中国古典戯曲論著集成一(中国戯劇出版社 一九五九年) に拠る。また、康崑崙に関する同様の記事は、

唐・段安節『琵琶録』

宋・李昉『太平御覽』巻五八三

宋・晁載之『續談助』巻一

明・何良俊『四友齋叢說』巻二六

清・康熙中敕撰『古今圖書集成』樂律典卷一一四

などにも見える。

- (31) 『西域史研究』上(岩波書店 昭和十六年)。原載は、明治三十三年、三十四年『史学雑誌』十一・十二、十二・一・二号。
- (32) 同右『西域史研究』上所載「西域史上の新研究」。原載は、明治四十四年『東洋学報』一・三、二・一、三・一・二号。
- (33) 『西域史研究』下(岩波書店 昭和十九年)。原載は、大正十三年『東洋学報』十四・四。
- (34) 『羽田博士史学論文集』上巻歴史篇(京都大学東洋史研究会 昭和三十三年)。原載は、大正十二年『支那学』三一五号。
- (35) 内藤博士還曆祝賀『支那学論叢』(弘文堂 大正十五年)。
- (36) 『長安の春』(昭和十六年)所収。
- (37) アジア歴史辞典第三卷「康国」の項(平凡社 一九六〇年)。

※(補記)脱稿後、以下の三点について訂正と補加の必要が生じた。改稿もままならず、ここに補記する。

- (補1) 十頁、註(10)「春題華陽觀」詩について。華陽觀は長安永崇里にあった道觀の名。大曆十二年(七七七)の建立。唐の代宗の第五女華陽公主(新唐書卷八三)の旧宅。代宗は玄宗の孫、在位七六二―七七八年。永貞元年(八〇五)、白居易は元稹らとこの華陽觀に寓居して、制科の受験勉強に励んだ。この詩もその頃の作である。従って、白居易のこの詩の題下注に言う「旧内人」、又は詩中に言う「頭白の宮人」とは、直接には代宗時の旧内人、宮人を指すのであり、私がここに引用するようにな天宝の遺民の謂ではないと思われる。故にこの一節を削除する。

(補2) 二頁、十三頁、註(18)、白居易が李白、杜甫に言及した詩文について。更に、白居易が韋応物(七三六―?)に言及した詩文についても補加したい。羅聯添「韋応物事跡繫年」(幼獅学誌八一、一九六九年)のほか、專論に赤井益久「韋応物と白楽天」(国学院雑誌八一五、昭和五五年)がある。

(補3) 三十頁、註(27)について。安祿山も元來は康姓であったという説は、新唐書卷二三五本伝に「本姓康」とある。やはり西域渡来人というほどの意味であらう。